

書評

宇野 彰 編著

高次神経機能障害の臨床—実践入門—

小児から老人，診断からリハビリテーション，福祉まで

江藤文夫（東京大学医学部附属病院リハビリテーション部）

本書は雑誌 Modern Physician の特集号を元に加筆修正されたもので，この領域が網羅された入門書としては第一級の最新テキストである。

ライフを対象とした近代医学の展開は，生命だけでなく生活の回復にも重点を置くようになり，リハビリテーション医学を生み出してきた。起立二足歩行を移動手段として社会活動を営むヒトにとって，まず運動器の形態と機能，それらを制御する神経系の機能，さらにそれらにエネルギーを供給する呼吸循環器系機能がすべて協調して作用することが必要である。この3つの系の中で誰もが興味を抱くが，難解さにしり込みする正直な人々の多いのが神経系である。二足歩行以外にも移動手段は考案され続け，呼吸循環に関する生命維持手段も格段の進歩を遂げてきた。コンピュータの進歩は記憶容量を短期間に増大させてきたが，脳の高次機能を代償する装置としては程遠い。

聖書の「はじめに言（ことば）ありき」の「ことば」は英語の word の名訳であるといわれる。「単語

と訳したのでは成句の意味は通じなくなる」というのが本当にそうであろうか。古代ギリシャ人はギリシャ語の文法の中に論理を見いだした。単語と訳されていたなら，今「ことば」に抱くイメージを「たんご」に思い浮かべるのではなかろうか。ヨーロッパのプロテスタント諸国での国語作りは聖書の母語訳を生み出す作業に依存したとされるが，文字言語について考えると古くは英語も同様であろう。ヘブライやラテンではなく英語の時代に，本格的に聖書圏グローバル化の波に日本語はさらされている。そこで日本語が非論理的とされるのは当然である。

さて，生成文法の普遍性はともかく脳の構造は普遍的に思える。分子遺伝学と平行して各種画像診断法の進歩により，神経系に対するアプローチは新たな展開の時代を迎えている。本書により，高次脳機能障害や高次神経機能障害の領域への興味を抱く人々が増えることを願うものである。

（B5 頁134 3,500円＋税 2002 新興医学出版社刊）